

## フランコ・ロテッリへの感謝の言葉

日本に初めて、イタリア精神保健改革のニュースがもたらされたのは 1985 年秋でした。1986 年 1 月、僕は初めてトリエステを訪ねました。その時に精神保健局で聞いたフランコ・ロテッリの言葉は、衝撃的でした。

彼はこんなことを言いました。

精神科医に「あなたは患者の味方か」と尋ねたら、きっと 90%が「Si」というだろう。しかし、これらすべてが僕らの同志というわけではない。

僕らは患者の家に行く。ところが、精神科医の多くは、患者のほうから医者のもとへやってくるのを望んでいる。

家族に見捨てられた患者がいたらどうするか。精神科医の大半は、「それはオレの仕事ではない」というだろう。僕らは違う。患者のために別の生き方を見つける。

職場をクビになった患者がいるとしよう。精神科医の大半は「それも俺たちの仕事ではない」と逃げる。しかし僕らは雇い主を説得する。僕らは新しい職場を作る。患者たちと生活協同組合を作る。

改革を口にする精神科医はたくさんいるが、言っていることの中身は、僕らと違う。

病院の主人であることと本当の精神科医は、両立しない。

患者を押さえつけるなんて実にたやすいことだが、僕には、それはできない。

僕は、本当の精神科医でありたい。

日本には、こんなことを言う精神科医はいません。この時以来、このフランコ・ロテッリの言葉が僕のバイブルになりました。

日本では、精神病院経営が大儲けのビジネスになっています。精神病院に頼り切った日本の精神保健は、おそらく世界で最悪です。日本の現実に直面して疲れたジャーナリストの僕にとって、フランコ・ロテッリの言葉は、精神安定剤みたいなものです。

フランコが世を去ったさみしさを、言葉で言い表すことはできません。

今は、フランコの言葉を読み返しては涙しています。

おおくまかずお